

中世から近代の字書に見る字音の消長

— 「眠」 —

黒沢晶子（東北文教大学）
akuros9638@gmail.com

【要約】

「眠」の字音は本来「めん」だった。辞書における「睡眠」の読みを調べると、室町時代に「みん」の最も早い例が出現しているが、それが一般化するの江戸後期以降である。一方、禅宗由来の「眠蔵」・「打眠衣」は「めん」の読みが維持されるが、近代以降の辞書の見出し語からは姿を消していく。「安眠」などの古い言葉が19世紀の辞書に「みん」の字音で「復活」し、「睡眠」とともに、新字音「みん」の定着に貢献した。だが、「眠」を含む新語が数多く出現するのは、今回の辞書調査の範囲より後のことになる。また、「みん」という慣用音が生じた原因は音符「民」からの類推と考えられる。

1. はじめに

本稿では、黒沢（2020）に続いて、ある漢字の字音が変化していった過程をたどってみたい。本稿で取り上げるのは「ねむる」の「眠」という字である。私たちは、この字の音が「みん」だと、それを当たり前のことと思っている。だが、この字は、以前は「めん」と読まれていた。「睡眠」は長い間「すいめん」だったのである。



図1：睡眠 すいめん
室町中期『文明本節用集』
国会図書館

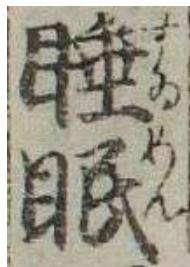


図2：睡眠 すいめん
1861『江戸大節用海内蔵』
国文学研究資料館

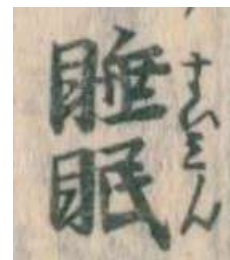


図3：睡眠 すいみん
1815『蘭例節用集』
国会図書館

図1は室町時代中期にできた『文明本節用集』という辞書、図2が1861年の『江戸大節用海内蔵（かいだいぐら）』という辞書のものだが、ふりがなを見ると、どちらも「すいめん」と書かれている。図3は1815年の『蘭例節用集』で、これは3番目の字が「三」の変体仮名で、現代語と同じ「すいみん」となっている。そこで、いつごろ、この「すいめん」が「すいみん」に替わっていったのかを辞書によって調べ、変化がどのような段階を踏んで起こっていったのか、また、なぜ「めん」が「みん」と読まれるようになったのかを考察していきたい。

2. 隋唐音と呉音・漢音、および慣用音

日本語の主な漢字音、呉音と漢音は、中国の隋唐音にその元がある。「ねむる」の「眠」という字は、王力の再構音によれば、隋唐音で *mien* だった（『韻天網』で『広韻』を検索）。隋唐音が *-ien* で終わる字は、呉音・漢音が次の例のように *-en* で終わる。

見 賢 現 先 洗 千 前 天 田 電 編 麵 練...

一方、隋唐音が少し母音の違った *-iĕn*、*-iĕn* で終わる字は、呉音・漢音が *-in* で終わる。

銀 伸 新 真 神 親 人 仁 刃 尽 忍 敏 認； 緊 民...

この規則性を当てはめれば、「ねむる」という字は「めん」と読まれるはずであり、事実、過去においては、そうであった。また、現代の漢和辞典を引くと、「眠」の呉音・漢音は「めん」と記載されている一方、常用漢字音は「みん」となっている。本来「みん」になるはずではないのに、なってしまったため、「ねむる」の「みん」は呉音でも漢音でもない音、「慣用音」と呼ばれている。

慣用音とは、「呉音・漢音・唐音以外の、古来よく用いられている音」（湯沢 1987：84）をいう。漢和辞典によって何を慣用音とするかは異なる場合がある（湯沢 1987：96-102、高島 2012：20-36）が、本稿では藤堂（1980b）によった。例として、「硬（こう）」、「祉（し）」「耗（もう）」「格（こう：格子）」「合（がっ：合唱）」「宮（ぐう：神宮）」「後（ご）」「動（どう）」「実（じつ）」などが挙げられる。ここに挙げた例はすべて常用漢字音として認められており、私たちが常日頃、何の疑問も抱かずに使っているものである。慣用音と呼ばれる字音には、こうした例のように、常用漢字音訓表に載っている字音、すなわち、私たちが日々使っている字音が数多くある。当たり前の音でありながら、同時に、本来の字音ではないと言われていることになる。

3. 研究課題および調査対象の辞書

研究課題は、次の三つである。

- (1) 「眠」は、いつごろから「みん」と読まれるようになっていったのか。
- (2) 「打（た→だ）」の変化の2段階（黒沢 2020）は、「眠（めん→みん）」にも当てはまるか。
- (3) 「眠」は、なぜ「みん」と読まれるようになっていったのか。

(1)については、主に室町時代から明治時代にかけての辞書で「眠」を含む字音語のふりがなを調べていくことで明らかにする。今回、調査対象としたのは、表1に掲げた40種類の辞書である。鎌倉時代のものもあるが、主に室町時代から江戸時代を経て、明治時代までの間に作られた辞書である。また、大多数は国語辞典だが、ポルトガル語や英語、台湾語との対訳辞書、漢和辞典、韻書も含まれる。数は多いが、現代語の辞書と異なり、必ずしも調べたいことばが載っているわけではない。

表1：「眠」字音語ふりがな調査対象の辞書

	種類	辞書名	写本 刊本 活版	西暦	和暦	電子化資料の 所蔵
1	漢和	字鏡集	写	1245 以 前	寛元3以前	国会図書館

2	平仄	平他字類抄 100168889	写	1299 頃	正安 1 頃	大和文華館
3	国語	下学集 100000565	写	1444	文安 1 序	筑波大学
4	国語	文明本節用集/雑字類書	写	—	室町中期	国会図書館
5	国語	明応本節用集	写	1496	明応 5 花押	国会図書館
6	国語	堯空本節用集 100231613	写	—	室町	宮内庁書陵部
7	国語	下学集 (国会亀田本)	写	—	室町末期	国会図書館
8	国語	饅頭屋本節用集	刊	—	室町末期	国会図書館
9	国語	節用集	写	—	室町末期	国会図書館
10	国語	伊京集	写	—	室町末期	国会図書館
11	韻書	聚分韻略	写	1493 の 版 を 1547 転 写	明応 2 の版を 天文 16 に転写	国会図書館
12	国語	運歩色葉集	写	1571	元龜 2 書写	京都大学
13	国語	易林本節用集 200003097	刊	1597	慶長 2 跋	国文学研究資料館
14	漢字	落葉集	刊	1598	慶長 3 刊	国文学研究資料館学 術情報リポジトリ
15	対訳	日葡辞書	活	1603-04	慶長 8-9 刊	—
16	国語	節用集	刊	1611	慶長 16 刊	国会図書館
17	国語	節用集(源太郎出版)下巻	刊	1619	元和 5	国会図書館
18	韻書	聚分韻略	刊	1674	延宝 2 刊	岐阜大学
19	国語	新版合類節用集 100159199	刊	1680	延宝 8 刊	名古屋大学
20	国語	和漢音釈書言字考 合類大節用集	刊	1717	享保 2 刊	早稲田大学
21	国語	大万宝節用集字海大成	刊	1740	元文 5 改正	北海道大学
22	国語	倭節用悉改囊 100206215 ヤマトセヨウ シツカイブク	刊	1741	元文 6 刊	兵庫県青山歴史村
23	国語	女節用集罌粟囊 100183570 オンナセヨウシュウ ケシブク	刊	1743	寛保 3 刊	茨城県立歴史館
24	国語	増補懐玉蠡海節用集レイカイ	刊	1750	寛延 3 刊	茨城県立歴史館
25	国語	倭漢節用集無雙囊ムソウブク	刊	1752	宝暦 2 成立	弘前市立弘前図書館
26	国語	早引節用集	刊	1757	宝暦 7 刊	国会図書館
27	国語	大全早引節用集	刊	1788	天明 8 刊	小泉吉永コレクション
28	国語	偶奇仮名引節用集チョウハン	刊	1802	享和 2 成立	お茶の水女子大学
29	国語	蘭例節用集	刊	1815	文化 12 跋	国会図書館
30	国語	いろは節用集大成 100216015	刊	1816	文化 13 刊	弘前市立弘前図書館
31	国語	文章仮字用格雅俗早引節 用集 ブンショウカナツブカイ	刊	1830	天保 1 跋	国文学研究資料館

		200004491				
32	国語	永代節用無尽蔵 100241722	刊	1831 1849	天保2新刻 嘉永2再刻の 改正増補四刻	味の素食の文化センター
33	国語	万代早引節用集 200006696 バンダイヤビキセツヨウシュウ	刊	1849 1850	嘉永2成立 嘉永3刊	国文学研究資料館
34	国語	改正増補江戸大節用海内蔵 カタグラ 200004490	刊	1861	文久1序	国文学研究資料館
35	対訳	和英語林集成 第3版	活	1886	明治19刊	明治学院大学
36	国語	和漢雅俗いろは辞典	活	1889	明治22刊	国会図書館
37	国語	言海	活	1889-91	明治22-24刊	国会図書館
38	対訳	和英大辞典 (ブリタニカ)	活	1896	明治29刊	国会図書館
39	対訳	日台大辞典	活	1907	明治40刊	国会図書館
40	漢和	漢和大辞林	活	1910	明治43刊	国会図書館

辞書名欄の番号を < <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/> > に続けて入力すると、新日本古典籍データベースの画像が検索できる。それ以外の辞書画像は、辞書名欄・所蔵欄の情報、和暦等によって検索する。

4. 「眠」の字音調査結果と考察

4.1 「眠」の字音の変化はいつ起こったか

検索したのは、単漢字「眠」のほか、その字を含む13語だが、変化が追えるのは、比較的多くの辞書に載っている単漢字と「睡眠」「眠蔵」「打眠衣」の3語(表2)だけだった。それ以外の「安眠」「高眠」「佳眠」「閑眠」「就眠」「愁眠」「熟眠」「醉眠」「不眠」「横眠」は、掲載する辞書が限られていたため、いつ「めん」から「みん」になったかを見るには役に立たなかった。

表2: 検索語(多くの辞書に記載)

	見出し語	現代語辞書の読み	意味
1	眠	みん	(単漢字)
2	睡眠	すいみん	ねむること
3	眠蔵	めんぞう	寢室・納戸(禅宗でいう)
4	打眠衣(ふりがな)	ためんごろも	平常着る服。僧が寝るとき着る服。
5	打眠衣(漢字表記)	ためんごろも	同上

変化の過程がわかる単漢字字音調査の結果は、表3の通りである。ここで「単漢字のふりがな」というのは、韻書や漢和辞典では、その漢字に充てられた字音を指す。『落葉集』のうち、部首から引く「小玉篇」を含む。また、国語辞典には、見出し語(例えば「眠」)のふりがなとして漢字の右側に「ネムル」、左側に「メン」と記載する形式をとる辞書があり、その場合、その左側のふりがなを指している。江戸時代には、見出し語「眠(ねむる)」を行書で示した左側に、同じ語を楷書でも載せ、「眠(メン)」と記す形式も多く見られる。これも「単漢字のふりがな」とした。

単漢字のふりがなは、表 3 のように、室町中期の『文明本節用集』から江戸中期にかけては、6 種類の辞書で「めん」としている。江戸中期から後期にかけて、1752『倭漢節用無雙囊(むさうぶくろ)』、1788『大全早引節用集』、1802『偶奇(ちやうはん) 仮名引節用集』の 3 辞書に「みん」が現れる。が、江戸後期、1816 年の『いろは節用集大成』では再び「めん」となり、明治になってできた 1910『漢和大辞典』には「みん」と「めん」両方の字音が示されている。このことから、江戸時代後期以降も「眠」の字音に「めん」があるという意識が残っていたと推測できる。一方、単漢字の字音「みん」は、江戸時代後半になって辞書に掲載されるようになったことがわかる。

表 3：単漢字「眠」のふりがな

室町中期	1493 版 1547 写	1598	1674	1740	1741	1752	1788	1802	1816	1910
文明本 節用集	聚分韻 略	落葉集	聚分韻 略	大万宝 節用集	倭節用 悉皆囊	倭漢節 用無雙 囊	大全早 引節用 集	偶奇仮 名引節 用集	いろは 節用集 大成	漢和 大辞林
めん	めん	めん	めん べん ゑん	めん	めん	みん	みん	みん	めん	みん めん

次に「睡眠」のふりがなを見ると、表 4 のように、室町中期から江戸中期にかけて 14 種類の辞書で「すいめん」とふりがなをふっている(図 1、2)。「すいみん」が現れるのは案外早く、室町時代の『堯空本節用集』にぼつんと 1 回出てくるが、次は江戸中期の 1740『大万宝節用集』にとど。江戸後期の 1815『蘭例節用集』(図 3)以降の 5 辞書、および明治期の 5 辞書では「すいみん」が標準的となる。

表 4：「睡眠」のふりがな

室町中期	1496	室町	室町末	1598	1603	1680, 1717	1740	1741, 1750	1752	1757, 1766
文明本 節用集	明応本 節用朱	堯空本 節用集	饅頭屋 本 節用集	落葉集	日葡 辞書	2 辞書	大万宝 節用集	2 辞書	倭漢節 用無雙 囊	2 辞書
めん	めん	みん	めん	めん	men	めん	みん	めん	めん	めん

1788	1815	1816	1830, 1849	1849	1861	1886	1889	1896	1907	1910
大全早 引節用 集	蘭例 節用集	いろは 節用集 大成	2 辞書	永代 節用 無尽蔵	江戸大 節用集	和英語 林集成	和漢 雅俗 節用集	和英 大辞典	日台 大辞典	漢和 大辞林
めん	みん	みん	みん	みん めん	めん	みん	みん	min	みん	みん

室町時代と江戸中期に飛び地のように「みん」が現れているのは、そのころから「みん」と読むことが行われていたことを意味する。だが、一般化するのは江戸後期以降になってからだったようだ。

また、1740『大万宝節用集』では、見出し語「睡眠」のふりがなは「すいみん」である一方、「ねむる（眠）」単漢字につけた字音は「メン」となっている（表3参照）。同一の辞書で「眠」の字に「みん」と「めん」二通りの字音を認めているわけである。

さらに100年後の1849『永代節用無尽蔵』では、「睡眠」の見出し語のふりがなを「すゐみん」とすると同時に、見出し語下の注に「すゐめん」¹とも記している。「すいみん」を代表としたが、「すいめん」と読むこともあるということだろうか。何らかの形で2つの読みが併存していたものと思われる。「みん」が先に記載されていることは、従来の「すいめん」よりも新しい「すいみん」がよく使われるようになっていたことをうかがわせる。

「睡眠」の読みの変化を見てわかるのは、早くは室町時代から「みん」と読むことがあったこと、だがそれが一般化するのは江戸後期になってからだったことである。字音の変化は、長い時間をかけて進み、ある時期から新しいほうの読みが力を得ていくものようである。

これに対して、「眠蔵」は変化していない（図4、図5）。「眠蔵」というのは、禅宗で寢室や納戸のことをいうことばだが、室町中期の『文明本節用集』から1896『和英大辞典』に至るまで、18の辞書で一貫して「めん」が充てられている。（語のふりがな表記は「めんざう」または「めんさう」。）18辞書の中には対訳辞典である1603『日葡辞書』、1896『和英大辞典』も含まれ、それぞれ **Menzō**、**Menzō** となっている。



図4：眠蔵
メンザウ
室町末『伊京集』

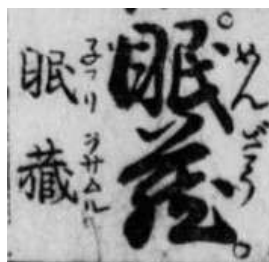


図5：眠蔵
めんざう
1741『倭節用悉皆囊』

また、「打眠衣」（普段着、僧の着る寝巻）の「眠」の読みもほぼ無変化である。「ためんごろも」「だめんごろも」「ためんのころも」のように、異同があるのは「打」の読みであって、「眠」は室町中期の『文明本節用集』から1896『和英大辞典』に至るまで、この語を見出し語に持つ23の辞書で一貫して「めん」であった。ローマ字表記の辞書でも同様に、**Tamengoromo**（1603『日葡辞書』）、**Damengoromo**（1896『和英大辞典』）だった。ひとつだけ例外があり、1815年の『蘭例節用集』では、「だみん」となっている（「衣」の付いていない「打眠」）。

4.2 「打眠衣」の表記が「打眠衣」に

「打眠衣」に関しては、おもしろい現象が見られる。「打眠衣」の「めん」の部分は本来「ねむる」という字なのだが、「まなこ」という字で書かれる辞書がいくつも出てくるのである。

¹ 「睡眠」の「睡」は「すい」が正しい。

図6では「眠」、図7は「眼」の字が使われている。後者と同じ辞書では、図8のように「眼前（がんぜん）」を訓読みでは「メノマヘ」と示している。そのことから見て、「ためん」の「めん」を「め」と解釈し、それで「め」を表す「まなこ」の字を当てたのではないかと思われる。

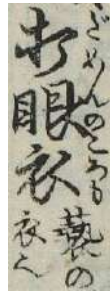


図6：打眠衣
1611『節用集』

図7：打眼衣
1861『江戸大節用海内蔵』

図8：眼前 がんぜん メノマヘ
1861『江戸大節用海内蔵』

「ねむるの打眠衣」は17の辞書にあり、「まなこの打眠衣」は6種類の辞書に載っている。「眠」と「眼」は行書になると、よく似て見える。字形が似ていることも、こうした現象を誘う一因になっているかもしれない。

表5は、「睡眠」に「みん」とふりがなを打つか、「ためんごろも」に「まなこ」の字を当てているか、各辞書の表記を並べてみたものである。どんな関係になっているだろうか。

この表を見ると、「睡眠」を「すいみん」と読み、かつ「打眠衣」に「眼」を充てる辞書は3種類に限られている。つまり、「睡眠」が「すいめん」から「すいみん」になることと、「ためんごろも」に「まなこ」という字が使われることとは、それぞれ独立して起きたことがわかる。ただ、「ねむる」という字が「めん」でなく「みん」と読まれるようになっていったことで、「めん」が「眠」という字ではない、あるいは「め」は「まなこ」という字で書くんたという認識が強められた側面があるのではないだろうか。

表5：「睡眠」の読みと「打眠衣」の「めん」の表記

	1496	室町	1717	1815	1816	1849	1861	1889
辞書	明応本 節用集	堯空本 節用集	合類大 節用集	蘭例 節用集	いろは 大成	万代 早引	江戸大 節用	和漢 雅俗
睡眠	めん	みん	めん	みん	みん	みん	めん	みん
打眠衣	眼	眠	眼	眠	眼	眼	眼	眼

さて、近代になると、表6のように、「ねむる」という字は「みん」と読まれるのが普通になっていく。それは、「安眠」「就眠」「熟眠」など、「眠」を含む漢語が辞書に載るようになる動きと軌を一にしている。一方、禅宗とともに入ってきた古いことば、「打眠衣」や「眠蔵」の「眠」に充てられた読みは、従来通り「めん」だが、こうした言葉を載せる辞書は少なくなっていく²。

² 『日本語歴史コーパス』で「眠蔵」は狂言に3件、「打眠」は使われておらず、使用頻度は低い。

表6：近代の辞書における「眠」の読み

	1886 和英語林集成	1889 和漢雅俗	1889-91 言海	1896 和英大辞典	1907 日台大辞典	1910 漢和大辞林
安眠	みん	みん	みん	min	みん	みん
就眠				min		みん
愁眠						みん
熟眠			みん	min		みん
睡眠	みん	みん		min	みん	みん
不眠						みん
眠蔵				men		
打眠衣		めん		men		

実は、表6のうち「安眠」「熟眠」「不眠」の3語は、室町時代の辞書にも「めん」として現れるが、「不眠」は江戸後期まで、また「安眠」「熟眠」は江戸時代を通じて今回調査した辞書には記載されていない。それが長い空白期間を経て、再び辞書の見出し語となったときには「みん」としてであった。(表7) この3語を『日本語歴史コーパス(CHJ)]で検索すると、「安眠」は1887年から1925年までに61件、「不眠」は1894年から1933年までに28件、「熟眠」は1887年から1925年までに7件現れている。近代になって、これらの概念が重要になってきたといったことがこの頻度にも辞書への掲載にも関係しているかもしれない。

表7：「安眠」「不眠」「熟眠」の辞書・コーパス初出

	辞書調査 初出 めん	辞書に不掲載の 期間	辞書調査 初出 みん	日本国語大辞典 初出	CHJ 頻度	CHJ 初出
安眠	1493	1494~1885	1886	17C 前期	61	1887
熟眠	1598	1605~1888	1889-91	1520 頃	7	1887
不眠	1598	1605~1909	1810	1212-15	28	1894

4.3 「眠」の字音の変化 まとめ

以上の調査結果から、一つ目の研究課題「『眠』はいつごろから『みん』と読まれるようになっていったのか」への答えをまとめると、次のようになる。

禅宗からきた「眠蔵」「打眠衣」は、ほぼ「めん」と読まれ続けた。が、近代の辞書からは姿を消していく。一方で、「ためんごろも」は「眼(まなこ)」を用いて「打眠衣」とも表記された。これは「眠=みん」、「眠≠めん」、「め=眼」という認識を反映しているのではないか。

単漢字の読みは江戸中期以降「みん」が出現するようになる。これに対して「睡眠」のふりがなは、室町時代に「みん」の最も早い例が出現している。だが、それが一般化するのは江戸後期以降である。中世から近代にかけて、「眠」字音語として辞書の見出し語に取り上げられることの最も多かった「睡眠」が恐らく新しい字音「みん」を引っ張っていく力となった。近代以降は、「安眠」「熟眠」などの字音語も再び辞書に加わり、それらが「みん」と読まれ、「眠」の字音として「みん」が定着していっ

たものと思われる。

5. 「打（た→だ）」の変化の2段階は「眠（めん→みん）」にも当てはまるか

さて、以上の調査結果から、二つ目の研究課題について、考えてみたい。黒沢（2020）では、「打」の字音が「た」から「だ」に変化していく過程を調べ、字音の変化には次のような2段階があるのではないかと考えた。

- (1) 古くから伝わる字音語が一部新しい字音で読まれ始める。
- (2) 新しく作られた字音語が新しい字音で読まれる。

「打」では、(1)に当たるのが「打飯（たはん）」「打眠衣（ためんごろも）」「打成一片（たじょういっぺん）」「打破（たは）」だったが、「眠」では「睡眠（すいめん）」や単漢字「眠」がこれに該当する。

(2)は、「打」では、「打算」「打診」「打倒」「打電」などが新しいことばだった。一方、「眠」はどうかと言うと、1896年の辞書に現れた「就眠」ぐらいしか当てはまるものがない。

ただ、新語ではないが、室町時代の辞書に載っていた「安眠」「熟眠」「不眠」が江戸時代後期から明治時代にかけて「復活」した。その字音は「めん」ではなく「みん」となっていた。

また、今回の辞書調査の範囲には現れなかったが、近代以降よく使われるものとして、「冬眠」「永眠」「催眠」「惰眠」などを挙げるができる。これは『日本語歴史コーパス（CHJ）』で明治以降になると現れる「眠」字音語のうち「睡眠」以外で10件以上あるものを頻度順に並べたものである。これらの語は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）に現れる現代語でもある。かつこの4語は『日本国語大辞典』の用例初出が明治時代の言葉である。こうした新語がいくつも作られ、多くの人に使われることによって、「みん」という字音がよりしっかりと定着していったと言うことはできるだろう。

「変化の2段階」については、2段階目の「新語」登場は今回の辞書調査の範囲以降のことになるが、古い言葉が新しい読みで使われたことが「眠（めん→みん）」の定着に寄与していると言えそうである。

6. 「眠」はなぜ「めん」から「みん」と読まれるようになっていったのか

三つ目の研究課題は、字音の変化の理由を探ることである。その原因として、「眠」の音符である「民」という字が呉音で「みん」と読まれるため、そこからの類推で「眠」も「みん」と読むようになった可能性が考えられる。実際、「民」は「眠」よりも多くの熟語を持っている。現代語のような頻度調査はできないが、1592年の辞書『落葉集』を見ると、次のように「民」を含む字音語が27語あるのに対して、「眠」は8語にとどまっている。（参考：ゴシックは『明鏡国語辞典』第三版で見出し語となっている語）

民（みん）：逸民 幸民 窮民 君民 国民 山民 士民 四民 諸民 小民 人民 万民 撫民
民屋 民家 民間 民気 民言 民俗 民部 民部卿 民部少輔 民部少丞 民部大丞
民部大輔 民兵 良民 27 熟語

眠（めん）：佳眠 閑眠 愁眠 熟眠 睡眠 不眠 眠蔵 横眠 8 熟語

「民（みん）」を含む字音語にたびたび触れることによって、「民」を同形要素として持つ「眠」もま

た、「みん」と読むという類推が働いた可能性は十分にあるだろう。

慣用音の成り立ちが、音符を通して字音を類推したことにあると思われる例は、それほど珍しくない。表 8 に挙げたのは、音符の字音と同じ字音を慣用音として持つ字の例であり、音符や同じ音符を含む字の字音からの類推によって慣用音が生まれた可能性が考えられる。すべて慣用音が常用漢字音となっている。5 番は、「消耗」の「もう」だが、「モウは音符毛に引かれた俗音」(『学研漢和大辞典』)、『『しょうこう』の慣用読みが定着したもの』(『明鏡国語辞典』)と辞典にも注記されている。音符の「毛」を「もう」と読むことから、「しょうもう」という読みが定着し、「もう」は「こう」とともに常用漢字音として市民権を得ている。また、6 番の「輪」は「ゆ」と読まれるが、呉音・漢音は「しゅ(しゅ)」だった。江戸中期の儒者、太宰春台は『倭讀要領』(1728)で「ゆ」という読みについて「字體ニ因テ誤レルナリ」と、誤りの理由を字体に求めている(高島 2012: 43)。音符「愈」が含まれていることを指しているものと思われる。

表 8: 音符の字音と同じ慣用音を持つ字の例

	漢字	呉音	漢音	慣用音	音符	同じ音符を含む字	音符の字音
1	莖	ぎやう	かう	けい	莖	経 徑 輕	漢音 けい
2	硬	ぎやう	がう	かう	更	梗	漢音 かう
3	祉	ち	ち	し	止	齒	呉音・漢音 し
4	批	はい	へい	ひ	比	—	呉音・漢音 ひ
5	耗	かう	かう	もう	毛	—	呉音 もう
6	輪	しゅ	しゅ	ゆ	愈	愉 喩 諭 癒	呉音・漢音 ゆ

ただし、音符の字音から必ずその字の字音が類推されるかという点、そうではなく、その反例と言えそうなものも見つかる(表 9)。「返」は慣用音で「へん」と読むが、音符の字音は「はん」である。なぜ、「返」を「はん」と読まないのだろうか。「反」を音符に持つ「坂」「阪」「板」「版」「販」「飯」がすべて「はん」を字音とするにも関わらず、「返」にだけ「へん」の読みが生じたのは不思議でさえある。また、「迷惑」の「めい」も慣用音である。音符は「米」だから、字音は「まい」か「べい」であるのが自然なのに、なぜ音符に従わず、違う音を選んだのだろうか。こうした例を見ると、音符からの類推が起こりがちではあるが必然的なものではないことがわかる。

表 9: 音符からの類推ではない慣用音の例

	漢字	呉音	漢音	慣用音	音符または音符を含む字	音符の字音
1	返	ほん	はん	へん	反	漢音 はん
2	迷	まい	べい	めい	米	呉音 まい 漢音 べい

慣用音と呼ばれる字音を持つ漢字は、常用漢字に 200 字余りある。そして、その成り立ちは一様ではない。第 2 節で挙げた慣用音の例をもう一度見てみよう。

Aの「硬」「祉」「耗」は、**音符からの類推**で慣用音ができたと思われる例である。Bの「格子」の「こう」、「合唱」の「がっ」、「神宮」の「ぐう」は、他の字と結びつく際に**音韻上の変化**が起きたケースという共通性がありそうだ。Cの「後」「動」「実」は、A、B のようには説明できない慣用音である。慣用音の分類・成り立ちについては、今後の検討を必要とする。

A	硬（こう）	祉（し）	耗（もう）
B	格（こう：格子）	合（がっ：合唱）	宮（ぐう：神宮）
C	後（ご）	動（どう）	実（じつ）

7. 今後の課題

まず、ほかの慣用音について、個別に、字音が変わっていった時期を特定すること、次に、変化にどのような段階があるかを検証すること、さらに、なぜ変化したのか考えること、そして、広く慣用音と呼ばれる字音には、どのようなものがあり、その成り立ちには、どのようなカテゴリーがあるか、調べることを今後の課題としたい。

参考文献

- 小川誉子美（2020）『蚕と戦争と日本語－欧米の日本理解はこうして始まった』ひつじ書房
- 黒沢晶子（2011）「中国語母語話者と入声音－『循環型社会をジゲンシ』とは？－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.23, 137-145.
- 黒沢晶子（2013）「漢字音教材開発－入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか－」『日本語教育方法研究会誌』20-1.
- 黒沢晶子（2015）「漢字音教材開発－音符の活用－」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
- 黒沢晶子（2016）「漢字音の長音教材－中国語母語話者と非母語話者を対象に」『日本語教育連絡会議論文集』vol.29, 147-157.
- 黒沢晶子（2017）「漢字音の清濁を何から見分けるか」『日本語教育連絡会議論文集』vol.30, 103-117.
- 黒沢晶子（2018）「音符は漢字音学習にどのくらい活かせるか－カ・タ・ナ・ハ・マ行－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.31, 22-34.
- 黒沢晶子（2019）「常用漢字の字音を音符で見分ける－長さの違いはどこから来たか－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.32, 68-82.
- 黒沢晶子（2020）「中世から近代への字音の消長－「打」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.33, 48-65.
- 国語学会編（1976）『国語史資料集－図録と解説－』武蔵野書院
- 小島幸枝（1978）『耶蘇会板「落葉集」総索引』笠間書院
- 今野真二（2012）『日本語学講座第5巻『節用集』研究入門』清文堂
- 今野真二（2015）『戦国の日本語－五百年前の読む・書く・話す』河出書房新社
- 佐藤貴裕（2019）『近世節用集史の研究』武蔵野書院
- 佐藤貴裕「節用集の世界」<https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/rekishih.html> 2020年8月20日閲覧
- 高島俊男（2012）『漢字の慣用音って何だろう？』連合出版
- 藤堂明保（1957/1980a）『中国語音韻論－その歴史的研究』光生館
- 藤堂明保（1980b）「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社

- 中田祝夫（2006）『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引 影印篇・索引篇』勉誠出版
- 沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 沼本克明（2014）『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ずー字音仮名遣い入門ー』汲古書院
- 森田武（1993）『日葡辞書提要』清文堂出版
- 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社
- 湯沢質幸（1987）「漢字の慣用音」佐藤喜代治編『漢字講座 第3巻（漢字と日本語）』明治書院
- 吉田金彦（1971）「辞書の歴史」阪倉篤義編『講座国語史第3巻 語彙史』大修館書店

参考資料

韻典網 3.0 版 <<http://ytenx.org/kyonh/>>

『広韻』『中原音韻』等の韻書の検索ができる。声母、韻母の再構音一覧を付す。『広韻』のデータは、『宋本 広韻データ』に基づいている。

国立国語研究所（2021）『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』（BCCWJ）データバージョン 2021.03
<<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>

国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス（CHJ）』バージョン 2021.3
<<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>

国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>

国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース <<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>>

小学館国語辞典編集部編（2005-2006）『精選版日本国語大辞典』小学館

日本近代辞書・字書集（2014-16）上智大学学術研究特別推進費重点領域研究
<<https://www.joao-roiz.jp/JPDICT/>>

宋本広韻データ <<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html>>

科研費 基盤研究 C「次世代古典文献データベース構築の基礎的研究」（平成 14～16 年度、課題番号：14510494、研究代表者：村越貴代美）による成果の一

臺灣大學中國文學系・中央研究院資訊科學研究所（2012）『漢字古今音資料庫』
<<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/#>>

張玉書・陳廷敬他編（1716）『康熙字典』<<https://ctext.org/kangxi-zidian/zh>>

土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店

藤堂明保編（1980b）『学研漢和大事典』学研

藤堂明保編（2006）『漢字源』学研

森田武編（1995）『邦訳日葡辞書・邦訳日葡辞書索引』岩波書店

立命館大学アート・リサーチ・センター 「ARC 古典籍ポータルデータベース」
<https://www.dh-jac.net/db1/books/search_portal.php>

Japan Knowledge オンライン辞書・事典検索サイト <<https://japanknowledge.com>>